

東京外国語大学を退職するにあたって

On Retiring from Tokyo University of Foreign Studies

吉田 ゆり子
YOSHIDA Yuriko

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No. 26 (2024), pp. 253–254.

1991年4月1日、東京外国語大学外国語学部日本語学科に、「日本事情」担当教員として着任し、33年間在職させていただきました。当時、山之内靖先生に、東京外国語大学で日本史を教えるためには、アメリカの日本研究を知らなければならないと言われ、山内靖先生の大規模プロジェクトメンバーとともに、コーネル大学に同行させていただきました。そこで、酒井直樹、ヴィクター・コシュマン(J. Victor Koschmann)、ブレット・ド・バリー(Brett de Bary)各氏にお会いし、コロンビア大学でキャロル・グラック(Carol N. Gluck)氏のゼミに参加させていただきました。そこで、大きなカルチャーショックを受け、私自身も脱構築をはからねばならないという示唆をいただきました。

とはいえ、地を這い回るように、古文書を発掘し、調査・収集した史料を解説し、地域社会の歴史を研究するという、ある意味では泥くさいスタイルで研究してきた者にとっては、メタ・ヒストリーに転身することには、高いハードルがありました。そのため、ぐずぐずと脱構築をはかれないまま、自分の立ち位置を模索することになりました。自分には、これまでの研究スタイルしかない、学生に興味をもってもらえるよ

うに日本近世史を教えるのだ、という教育を自分なりに作り上げるのに、十数年かかりました。

そうした中で、「海外事情」とはほど遠いと思っていた私が、2009年度に海外事情研究所の所長として選出されました。その時の総会では、出席者は10人にも満たない会であったにもかかわらず、たいへん緊張したことを記憶しています。そして、選出後に、女性としてはじめての所長であることが強調されました。ただ、私自身は、女性も男性も同じ人間だという考えを何の疑問もなくもっていたため、ことさら女性や男性という区別をつけられることに抵抗感があり、つい一言、女性であることを強調しないでください、と言ってしまったという覚えがあります。この二年間の所長任期中に、「世界史セミナー」(世界史の最前線)を開始しました。これは、英語教師のリカレント教育を大学で始めたのを受け、今井昭男先生が提案されたものでした。学校教育の現場で歴史教育を担う教員に向けて、東京外国語大学に在籍される世界各地の専門家に、世界史研究の最前線を伝えることを趣旨としており、現在まで継続する海外事情研究所の主要事業として定着しています。また、研究所単位で「研究員」制度を設け、



外部からも研究員を公募しました。これは、海外事情研究所をポストク、若手研究者の所属先とすることで、研究者としての身分保証と、科研費の申請を可能とする制度とすることを目的としていました。その後、この研究員制度は、大学院で設けられた特別研究員制度に移行し、現在まで続いています。

そして、退職を前にした2022・2023年度に、二度目の海外事情研究所所長を勤めさせていただきました。新型コロナウイルスの影響で、2020・2021年度は教員がほとんど大学で顔を合わせることがなく、海外事情研究所の活動も下火になっていました。他方で、東京外国語大学に着任された新任教員の方は多く、海外事情研究所の所員となってくださる先生方も多数いらっしゃいました。そこで始めたのが、オンラインでおこなう、新所員の自己紹介をかねたランチョン研究会でした。毎週水曜日11時50分～12時30分に、新所員の研究のエッセンスを同僚たちが学ぶという、とてもお得で楽しい会となりました。その中には、すでに在職されていたにもかかわらず、海外事情研究所に所属していただいていた先生方もあり、お互いがどのような研究をしているのかを知ること、研究者という本来の姿で、お互いを見直すことのできる貴重な機会となりました。

海外事情研究所の運営は、年2回の総会と、年4～5回の幹事会での合議により審議・決定しておこなってきました。幹事の先生方や実務を担当してくださった教務補佐の方々に、心より感謝申し上げます。

退職に当たり、今後の研究課題の一つである、女性の存在を組み込んだ日本近世社会を考える取組の一環として、2023年3月14日にベトナムのハンノム研究院で開催されたワークショップ「東アジアの儒教資料とベトナム碑文：学際的アプローチ」(Confucianisms and Stele Inscriptions in East Asian Cultural Sphere:

An Interdisciplinary Approach) (主催：ハンノム研究院、VIETNAMICA プロジェクト、越日大学、JSPS 科学研究費助成事業基盤研究(B)「東アジア各国の「姓・生・性」の変容の比較史的研究——「東アジアの奇跡」の裏側で」(代表小浜正子))における口頭報告を、論文として掲載させていただきます。ご批判をいただけますと幸いです。